

楽曲分析にみる幼児の歌唱教材の研究

—— リズムを中心に ——

青木 弘子

(聖和大学大学院)

I はじめに

こどもが歌うことを目的として作られた歌唱曲には、一般の歌曲とは異なる特徴がある。それはこどもの発達からみての発声能力や理解力を考慮してのことと思われるが、筆者の研究によると、その特徴は「和声」において顕著に現れている。(詳細は1995年11月に開催された日本乳幼児教育学会において発表した。)

それでは「リズム」という観点からみた場合はどうか。「リズム」は「旋律」「和声」とともに「音楽の三要素」と言われているが、言葉を伴う歌の場合には「歌詞」も重要な要素であり、特にリズムに大きく影響を及ぼす一因となる。わらべうたや童謡・唱歌では、一般の歌曲に比べよりいっそう歌詞としての「日本語」がリズムを支配し、それが曲の「拍子」をも決定するとされている。そして武智、金田一、小倉、別宮など多くの研究者たちは、これは民族性や日本語の言葉の持つリズムによるものであるとしている。

彼らの研究を要約するなら、わらべうたや童謡・唱歌などには「リズム」という観点からみた場合、以下のような特徴があるといえる。

- (1) 農耕民族である日本人がもっているリズム感から2拍子および4拍子の曲がほとんどである。
- (2) 騎馬民族である西洋人の音楽文化から生まれた6/8拍子の曲は、わらべうたにはない。
- (3) 日本語の言葉のもつリズム、およびく高低アクセント>という特徴から、「七五調」や「五七調」の韻律が多い。

しかしながら国際化社会と言われる今日、日本の伝統がどんどん失われ、「日本の文化」「民族性」など忘れられようとしている。また音楽的にも目覚ましい発展を遂げ、世界に全くひけをとらない日本の音楽文化において、幼児たちが耳にする音楽も実に変化に富んでいる。

そのような中においても幼児の歌唱教材には上記のようなリズムの特徴があるのだろうか。時代を越えて今もこどもたちに親しまれている歌、あるいは新しく作られる多くの歌の中から教材として取り入れられる歌には、こどもたちが歌いやすいような拍子やリズムパターンが使われているのだろうか。

本研究では以上のような観点に着目し、実際に幼稚

園や保育所で歌唱教材として取り入れられている歌を楽曲分析することにより、そのリズム的特徴を明らかにしていきたい。

II 研究方法と手順

(1) 幼稚園・保育所の教師へのアンケートにより1年間で歌唱教材として取り入れられた曲を調査した。

対 象 近畿一円の幼稚園・保育所29園の教師84名
回収数(率) 26園(89.6%) 77枚(91.6%)

調査期間 1995年6月～7月

(2) 前回は調査により得られた曲(総数 511曲)を得票順に並べ、上位 100曲のうち同一題名が複数あるために曲の限定が不可能なものや、オリジナルの調が不明である曲などを除いた84曲に対して和声分析を行った。したがって今回も曲を統一するために、同じ84曲に対してa. 拍子 b. リズムパターン c. 歌詞の韻律を分析した。(分析を行った曲目は別紙参照)

III 結果と考察

a. 拍 子

歌唱教材84曲の拍子を調査した結果は右記のようであった。全体の89.3%にあたる75曲が4/4拍子と2/4拍子で作曲されていた。

4/4拍子	45曲
2/4拍子	30曲
3/4拍子	4曲
2/2拍子	4曲
6/8拍子	1曲

これははじめに述べた特徴と一致している。日本の音楽文化に3拍子系のリズムが馴染みにくいということとは以前から言われていることではあるが、幼児の歌唱教材に関しては特に顕著に現れている。

b. リズムパターン

リズムはひとつひとつの音符をみるよりも、リズムパターンとしてみた方がより曲の構成がはっきりわかると判断し、その曲の主となるリズムパターンで分類した。

その結果、76.2%にあたる64曲がそれぞれただ1つのリズムパターンによって構成されていた。さらにそのリズムパターンは、同じリズムが繰り返し使用されるリズムオスティナートである。

これは幼児の歌唱教材の特徴である「小節数が短い」「和声的に変化が少ない」「旋律が単純である」ということと関連し、展開が少ないために複数のリズムパターンがとりにくいということが考えられる。

A 1つのリズムパターンで構成された曲 64曲	
(1) 同じ音符が並列的に続くリズムパターン	27曲
(2) 付点を中心としたリズムパターン	19曲
(3) 1つの音符とその1/2の長さの音符の組み合わせによるリズムパターン	18曲
B 2つのリズムパターンで構成された曲 14曲	
(4) 同じ音符が並列的に続くリズムパターンと付点のリズムパターンの組み合わせ	9曲
(5) 同じ音符が並列的に続くリズムパターンとその2倍のリズムパターンの組み合わせ	5曲
C 3つ以上のリズムパターンで構成された曲 6曲	

また複数のリズムパターンで構成される曲も、その種類は少なく、同じ音符を並列したリズムパターンや付点を中心としたリズムパターンを他のリズムパターンと組み合わせるといった単純な構成となっている。

四分音符や八分音符などの同じ音符が並列的に続くリズムオスティナートの曲が多いのは、後で述べる「七五調」の歌詞とも関係するが、『すべての拍が同じ長さをもつ』という日本語の性質上、平面的なリズムオスティナートが言葉のもつリズムに一致するためということに因るものではないか。

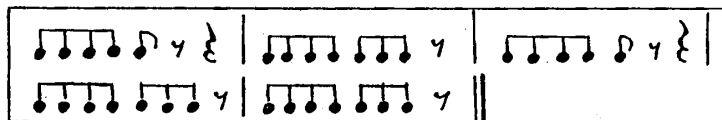
また非常に興味深い結果として、付点を中心としたリズムパターンの曲が多いということが上げられる。テンポ感をだし、弾むような楽しい感じをだすためにこのリズムが使われるのであろう。しかし英国伝承童謡などでは、弾む感じをだすためには、6/8拍子が使われる。日本では6/8拍子の曲は極端に少ないが、それもほとんどがゆったりとしたテンポで、3/4拍子と区別が付きにくく、本来の6/8拍子のもつ生き生きとした感じではない。この違いはやはり民族性や文化の違い、さらに英語と日本語の言葉のもつリズムの違いからくるものではないだろうか。

c. 歌詞の韻律

歌詞の韻律に関しては、「七五調」「五七調」「七七調」などが一般的であるが、ここでは「八五調」も一定の律のあるものとして分類した。結果は下記の通りである。全体の84.5%にあたる71曲に一定の律がみられた。

別宮によると和歌の基本	A 七五調、八五調、七七調など一定の律のあるもの	52曲
	B 七五調などの一定の律と擬音語などの自由な律との組み合わせ	19曲
	C 一定の律をもたないもの	13曲

リズムパターンは次のようなものである。



これはこのままで4/4拍子の、八分音符を並列的に続けるリズムオスティナートの曲になる。さらに和歌では字余りとされる「八五調」も、八分休符のところに拍をあてはめれば、なんら不自然な律ではない。

以上のようなことから、2/4拍子や4/4拍子が多いということ、また同じ音符が並ぶリズムオスティナートの曲が多いということと「七五調」の歌詞が多いとい

うことはすべて明確な因果関係にあるといえる。

さらに歌詞の韻律を分析するうちに、いくつかの特徴が見えてきた。Aの「一定の律のあるもの」には、歌詞の自然な口調が韻律にあっているもの（譜例1・2）、「七五調」に合うようにごろを合わせてあるもの（譜例3・4・5）などがあつた。

またBのような場合では、歌詞に擬音語がでてくる時にその部分を一定の律とは無関係にその言葉のリズムに沿ったリズムをあてている曲が多い。（譜例6・7・8）

その他、これらの一定の律に全く束縛されない自由な言葉のリズムでかかれている曲もいくつかあつた。「お化けなんてないさ」は というリズムパターンが全体を占めているが、『おぼけ』という3拍の単語に3連符をあて、その後の付点とともに切迫感のあるリズム進行で「お化けなんてない」「でももしいたら怖いな」というこどもの揺れる気持ちと緊張感を表現している。

また「おかあさん」は という出だしのリズムパターンであるが、これは「おかあさん」「なあに」という呼び掛けと返事の会話をそのままリズムに現している。旋律ともあいまって、こどもが母親に甘えるように呼び掛け、それに対して母親がやさしく応えている様子がうまく表現されている。

幼児の歌唱教材においては、特に歌詞の内容が重要であるために、日本語の言葉のもつ性質が拍子やリズムに直接的に影響をおよぼしていると考えられる。

しかし日本語には『読みのリズム』『喋りのリズム』というものがあるのではないだろうか。われわれは文章を読みながら声に出す時「各々の拍を同じ長さ」で話すが、会話の時はその拍は必ずしも一定であるとはいえない。したがって「七五調」などは『読みのリズム』であり、「おぼけなんてないさ」など自由な律でかかれている歌は、『喋りのリズム』であるといえる。『喋りのリズム』は日本語のリズムを新たな視点でとらえているだけでなく、その曲に変化を与え、歌詞の内容をより生き生きと表現しているように思われる。

＜参考文献＞「伝統と断絶」武智鉄二1969年風潮社「わらべうたとナーサリーライム」筑波名都江1992年晩聲社「日本語（上）」金田一春彦1995年岩波書店「日本の耳」小倉 剛1983年岩波書店「日本語のリズム 四拍子文化論」別宮貞徳1977年講談社現代新書「京語唱歌の世界」金田一春彦1995教育出版「楽曲分析にみる幼児の歌唱教材の研究 和声を中心に」青木麻子1995日本乳幼児教育学会第5回大会研究発表論文集